プロレタリア文化運動と〝コミンテルン三二年テーゼ〟

「昭和戦前期プロレタリア文化運動資料研究会」の資料集成作業の中から

伊藤　純

一．はじめに

現在われわれは「昭和戦前期プロレタリア文化運動資料研究会」の資料集成作業として小樽文学館所蔵池田壽夫（ひさお）旧蔵書[1]、元関西大学教授浦西和彦先生所蔵資料など、主として全日本無産者芸術聯盟（ＮＡＰＦ）、日本プロレタリア文化聯盟（ＫＯＰＦ）関連の生資料約一万点の画像化、データベース化を行っている。

この過程で、それらの資料――ビラ、檄文、パンフレット、各種の機関文書などに、繰り返し出現する独特の定型的な言葉、論理展開に辟易しつつ注目せざるをえなくなった。一体これは何なのか、なぜこのような〝同義反復〟の氾濫が生じているのか。

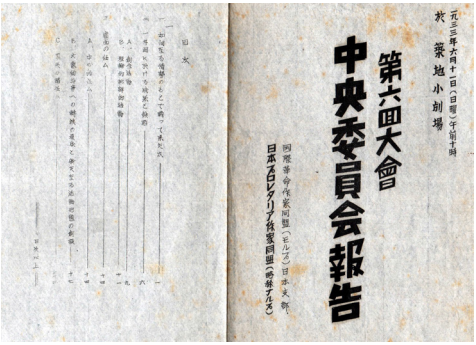
しかもこれらは、一次資料、同時代資料であり、誰かが意図的に作成した虚構の文書ではない。この時代の多数の人々が〝その気になって〟時には危険を冒し、疲労や睡魔と闘いながら、無償の正義感に燃えてガリ版（謄写版）を切って作りあげた歴史的実在物である。一体そこには何があったのかを、考えてみないわけにはいかない。

現時点では上記の集成事業は完成途上で公開に到っていないが、小樽文学館の「池田壽夫旧蔵書」（以下池田旧蔵書と略記）は同館で閲覧可能となっているので、主にそれらを参照して検討する。

二．日本プロレタリア作家同盟の文書に見る定型的表現

その言い回しの代表的な一例として池田旧蔵書所収の日本プロレタリア作家同盟「第六回大会中央委員会報告」[2]という文書を例示しよう。この文書は小林多喜二が築地警察署で虐殺された三ヵ月後、未ださめやらぬ怒りと恐怖の中で書かれたもので

『フェンスレス』オンライン版 第4号（2016/09/20発行）
占領開拓期文化研究会 senryokaitakuki.com


第六回大會
中央委員会報告
日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）

（図①）「第六回大会中央委員会報告」の表紙と目次部分。

あることは、注意しなければならない。原文は難読の謄写版印刷物であるが、その冒頭の部分を書き出してみると――

……一九三二年から今日に到る期間を特徴づけるものは、国際的、国内的情勢の異常なる変化である。資本主義の一般的危機の激化と社会主義的工業化、共営化及び文化革命の大綱領を巨人的テンポを以って遂行しつつあるソヴエート同盟にあって、階級の最後的精算と、国の全勤労人口を階級なき社会主義の意識的・積極的建設者へ転化する事を目標とする第二次五ケ年計劃が開始され、社会主義的世界革命の根拠地としての国際的威力が万国の労働者農民勤労階級に確固たる道標と自信を与へつゝある。

他方資本主義世界においては、経済恐慌は益々激化し、……国粋主義、排外主義の必死的努力にも拘らはず、不断に成長しつゝある世界経済恐慌は、生産の可能性と資本主義の一般的危機の条件下に於て、既に狭隘化した市場間に対立の極度の激化を導いた。

資本主義的安定の終焉は戦争の新たなる週期への直接的な突入を意味する。……日本帝国主義は、今や北支進入を目前にして此の両帝国主義（＊英仏・筆者注、以下同じ）との対立が激化し、アメリカ帝国主義との矛盾は太平洋をはさんで異常に激化し爆薬はまさに点火せんとしつゝあり硝煙は太平洋を掩はんとしつゝある。

（……は中略を示す、以下同じ）

一九三三年の文書としては、よく十年後の戦争を予言していることが注目されるが、この種の文章の書き出し部分の定型が、十分に表出されている。すなわち〝資本主義の一般的危機の深化で動乱は旬日に迫っている〟、それにたいして〝新興ソ連の社会主義の発展は目覚ましい〟という対比的文言である。

三、プロレタリア美術家同盟の文書

同じく池田旧蔵書にある、文化聯盟傘下の日本プロレタリア美術家同盟の同時期の文書も、瓜二つの言い回しが氾濫している。さらにこの文書では、作家同盟文書では明確には言及されなかった「戦略の変更」という言葉が出現する。

戰爭の拡大と革命的危機の切迫

ブルジョア民主主義の全面的反動化と、
勞働者農民の自覚的文化運動の勃興と成長

（図②）「新しい情勢と美術運動の新しい任務　1933・3・18／日本プロレタリア美術家同盟常任中央委員会」

A．戦争の拡大と革命的危機の切迫……新しい情勢、それは「資本主義安定期の終焉とソヴエート同盟に於ける昂揚」をもつて特徴づけられて居る。ソヴエート同盟では第一次五ケ年計画を四ケ年に完成し……第二次五ケ年計画の遂行へと邁進しつゝあり……

しかるに資本主義世界では――経済恐慌の深刻化、帝国主義諸国並びに植民地諸国に於ける××（＊革命）的昂揚の成長、帝国主義諸国家間の対立の一層の激化……かくして、資本主義の相対的安定の終焉の時期が到来した

ここでは、型の如く〝資本主義安定期の終焉〟と〝ソヴエート同盟に於ける昂揚〟が述べられているが、さらに「D」章では「戦略の変更」が説明される。

D．我々の新しい任務……重要な問題――それは、プロレタリアートの戦略の変更に伴ふプロ文化・美術運動の新たなる段階である。戦略の変更の問題とは、その基本的な部分は、日本に於て当面する××（＊革命）の性質に関する規定を、「社会主義革命への強行的転化の傾向を持つブルジョア民主主義××（＊革命）である。」と云ふ様に、最近改められたことに最も関係して居る。このことは何よりも先づ、日本における農業××（＊革命）の意義と××（＊天皇）制の役割とを過小評価することから我々が脱却しなければならないことを要求する。

……我々は今まで「戦争とファシズムに対する闘争」を我々の主要課題として来たが、日本におけるブルジョア＝地主的××（＊天皇）制の比重が正当に評価された今日、この課題は、戦争と絶対主義に対する闘争と改められなければならぬ。

美術家団体の文書として見ると、奇異な感じが否めない。この美術家団体の〝外部〟の何処かで何者かによって、運動戦略の変更が決定されたのでそれに従って、直ちにこの美術家団体でも考え方と行動を変えることが〝要求〟されていると会員に対して下達しているのである。

『フェンスレス』オンライン版 第4号（2016/09/20発行）
占領開拓期文化研究会 senryokaitakuki.com

ここで〝我々の新しい任務〟として指し示されている変更点は要約すると――

①目ざすべき日本革命戦略の基本は、当面は近代的民主主義を求める反封建革命であり、その過程で革命勢力の努力によって、社会主義を目ざす革命に変質させていく。

②従って、当面の闘争の相手は、封建的地主勢力と資本家勢力の利益を代表する〝天皇制官僚体制〟である。

――という二段階革命戦略を指し示し、直接に社会主義を目ざす一段階革命戦略からの変更を告知している。

そしてこの告知は、コミンテルンの[3]「日本問題テーゼ三一年草案」から「三二年テーゼ」への変更に符節を合しているのである。

四、「コミンテルン日本問題テーゼ」の変遷

コミンテルンは当初は、世界各国の社会主義運動を支援する運動センターとして始まった。

しかし、現実には最も状勢が切迫していると評価されたドイツでさえ革命は失敗し、ヨーロッパを中心とした高度に発達し、それ故に体制の矛盾と行きづまりが極限に達しているはずの資本主義国から革命が起こり、世界に連鎖するという〝世界革命〟のイメージは成立しないことが明らかになってきた。一九二八年のコミンテルン第六回大会に登場したスターリンはこの〝世界革命〟イメージをトロツキズム[4]として排斥し、資本主義諸国家に取り巻かれた状況でも、一国で社会主義国家は建設できるという「一国社会主義論」を主張し承認された。

この変化によってコミンテルンの役割は、世界革命の〝輸出センター〟というよりは、世界の資本主義国の渦中で、一国だけの社会主義国家として生きて行かざるをえなくなった「ソビエト社会主義共和国連邦」を社会主義の前衛として擁護する〝世界共産党の総本部〟へと変貌していった。そしてこのコミンテルンは、ことに、帝制ロシア以来東北アジアで利害の対立することが多い日本に強い警戒感を抱き、次に示すような日本に特化したテーゼ（these＝方針書、綱領）を何度も出しているのである。[5]

◆一九二二年の「日本共産党綱領草案」

一九二二年（大正十一年）のテーゼは比較的短文だが、その後の日本関連テーゼの基本的スタンスを方向付けたものといえる。その要旨は――日本を「封建的遺制・君主制権力が支配の根幹をなす国家」と規定し、これにたいする「民主的権利を要求する、一種の近代化革命が先ず求められ、それが社会主義革命の露払いになる」という典型的二段階革命論を唱えている。

◆一九二七年「日本に関する決議」（二七年テーゼ）

一九二七年（昭和二年）のこのテーゼは――

日本国家の民主化、君主制の精算、現存支配閥の権力よりの駆逐等のための闘争は……資本が高度のトラスト化の水準に達した国においては不可避的封建的残存物に対する闘争より資本主義それ自体に対する闘争に転化するであろう。日本のブルジョア民主主義革命は極めて急速度に社会主義革命に転化するであろう。(6)

として、二二年文書の二段階革命論を踏襲しつつ、資本主義の高度化に伴って社会主義への転化がより早急に起こりうる、と一段階革命論に近づいている印象を受ける。

もっとも「二七年テーゼ」の、それが発せられた時点での最大の訴求点は一段か二段かという〝歴史認識〟よりも、当時の日本の社会主義運動の落ち込んでいた分裂状態――山川イズムと福本イズムの分裂を解消し戦線を統一することへの勧告であった。

◆一九三一年の「日本共産党政治テーゼ草案」

「三一年テーゼ草案」は、さらに進んで従来の「二段階革命論」を修正し、

かくして若き日本資本主義国は、国内の労働者農民の血税と、植民地反植民地民衆の鮮血を吸うて急速に成長し……この時代における基本的な階級的矛盾はブルジョアジーとプロレタリアートとの対立である。

かくて来たるべき日本の革命の性質は『ブルジョア民主主義的任務を広汎に抱擁するプロレタリア革命』である。(7)

と、直接社会主義革命を目ざす一段階革命論を表明したことで注目されているが、起草者の失脚によって草案のまま廃棄された。しかし、一段階革命論に立ったということは、日本が半封建的絶対主義段階から抜け出して、近代的金融・産業システムを獲得した進んだ資本主義国の段階に到達したと認めることを意味し、歴史認識の大きな変化といえる。そしてこのテーゼは「草案」ではあったが日本の社会主義運動、文化運動に一定の影響を与えた。

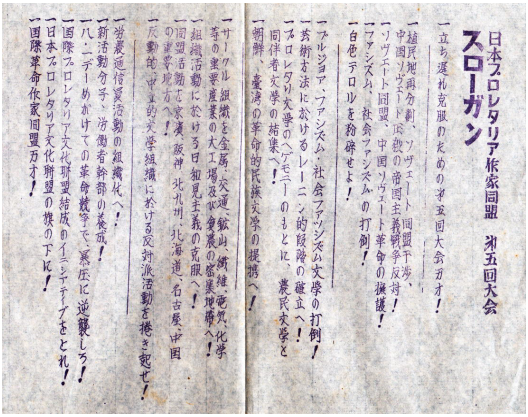
「三一年テーゼ草案」はモスクワの共産大学で五年間学んだ風間丈吉が起草に関わったとされ、一九三〇年帰国し共産党を再建した風間によって『赤旗』紙上に発表された。この風間が委員長となり一九三一年一月から一九三二年十月まで存続した共産党組織は後に「非常時共産党」の名で知られる。そのおどろおどろしいネーミングにも関わらず「非常時共産党」は、大衆化を狙いシンパ（同情者・資金提供者）組織を拡大する開放的政策をとった。シンパは多くの有名人、はては皇族の一部にまで及び、機関紙『赤旗』が活版・週刊で発行されるまでになり、党勢は戦前期では最大に拡大したといわれる。(8)

『フェンスレス』オンライン版 第4号（2016/09/20発行）
占領開拓期文化研究会 senryokaitakuki.com

このような大衆化、党勢拡大は、基本政策の上で、直接社会主義革命を志向するというわかりやすさと、反封建・天皇制廃絶という日本人の心情になじみにくいスローガンを蔭に隠したという効果が関わっていたと考えられる。

一九三二年五月開催の日本プロレタリア作家同盟第五回大会のスローガンにも

・帝国主義戦争反対！
・ソビエト同盟、中国ソビエト革命擁護！
・社会ファシズム文学打倒！
・サークル組織を重要産業の大工場と貧農の密集地帯へ！


日本プロレタリア作家同盟　第五回大会
スローガン
一立ち遅れ党服のための第五回大会ガオ！
一植民地再分割、ソヴェート同盟干渉、中国ソヴェート同盟、独逸の帝国主義戦争反対！
一ソヴェート同盟、中国ソヴェート革命の擁護！
一ファシズム、社会ファシズムの打倒！
一白色テロルを粉砕せよ！
一ブルジョア、ファシズム、社会ファシズム文学の打倒！
一芸術方法におけるレーニン的段階の確立へ！
一プロレタリア文学のヘゲモニーのもとに、農民文学を一朝鮮、臺湾の革命的民族文学の提携へ！
一サークル組織を金属、交通、鉱山、繊維、電気、化学等の重要産業の大工場及び貧農の密集地帯へ！
一組織活動における日和見主義の克服へ！
一同盟活動を家族、飯神、北九州、九海道、名古屋、中国の重要地方へ！
一反動的、半封的文学組織に於ける反対派活動を捲き起せ！
一労農通信員活動の組織化へ！
一新活動分子、労働者幹部の養成！
一八・二デーをめざしての革命戦争で、弾圧に逆襲しろ！
一国際プロレタリア文化聯盟結成のイニシアチーブをとれ！
一日本プロレタリア文化聯盟の旗の下に！
一国際革命作家同盟万才！

（図③）「日本プロレタリア作家同盟第五回大会スローガン」

などが列挙されているが、天皇制への言及は避けられている。

しかしこの〝大衆路線共産党〟には、驚くべき〝闇〟が組み合わされていた。五人の中央委員（風間丈吉、岩田義道、宮川寅雄、紺野与次郎、飯塚盈延（みつのぶ））の一人、飯塚が、現在ではスパイM、あるいはスパイ松村として活動の実態が解明されている警視庁毛利特高課長直属のスパイだった。[9] スパイMは風間共産党の資金と設営という非合法活動の根幹を担当し、一九三二年末までにほぼ共産党組織を壊滅に追いこんだ。

一面から見ると、この時期のシンパ組織の大衆化路線は、周辺同情者までを一網打尽にあぶり出すための毛利特高課長の〝泳がせ〟戦略だったとも見える面があり、事実この時期にはスパイMの正確な情報に基づく作家同盟周辺のシンパ、資金供与者への検挙が的確になされていることが、（脚注8）の貴司の記述などからもわかる。

◆一九三二年の「日本における情勢と日本共産党の任務に関するテーゼ」（三二年テーゼ）

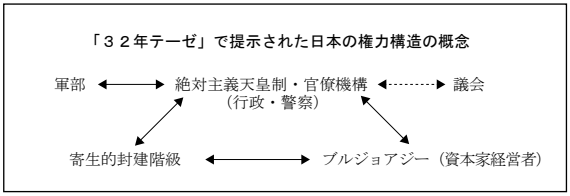
三二年テーゼは、三一年テーゼを否定し、二七年テーゼ以上にラジカルな〝二段階革命論〟に立ち戻った。このテーゼの根幹をなす基本的文言は――

> 日本の天皇制は、一方で主として地主として寄生的封建的階級に立脚し、他方では又急速に富みつつある強欲なブルジョアジーにも立脚し、これらの階級の棟領と極めて密接な永続的ブロックを結び、仲々うまく柔軟性をもって両階級の利益を代表し、それと同時に、日本の天皇制は、その

独自の、相対的に大なる役割と、似而非立憲的形態で軽く粉飾されているに過ぎない、その絶対的性質を保持している。（＊傍線は筆者、なお〝天皇制〟という訳語は〝君主制〟にかわって「三二年テーゼ草案」から使われるようになった）[10]

である。奇妙なリズムを持つ悪文（悪訳？）[11]だが、「寄生的封建的階級」「ブルジョアジー」という新旧二つの優越的経済勢力と柔軟な連携を保ちつつ、しかしその二階級の利益に完全には従属しない自由度を保つ独自の「絶対主義天皇制」が具体的な権力機構、暴力システムとして日本国民の上に君臨しているという、独特のピラミッド型構造を提起した。議会は立憲制を偽装するための形骸的組織、軍部は天皇制権力をも相対化しうる独自の暴力組織として、三角形の外側に位置づけられた。

そして、このような構造を持った〝日本帝国主義〟の性質として



（図④）「『３２年テーゼ』で提示された日本の権力構造の概念」

――

……強盗帝国主義の企てた全軍事行動（＊「満州の占領、上海及び支那その他の地方における血腥き諸事件」とテーゼ冒頭に書かれている）は、現在の世界経済恐慌の諸関係の下に最大の帝国主義強国の一つによって行われた最初の、広汎な計画を持つ軍事的進出である。[12]

日本において独占資本主義の侵略性は絶対主義的な軍事的＝封建的帝国主義の軍事的冒険主義によって倍加されている。[13]

と、極めて強い言葉でその軍事的侵略性の危険を指摘する。そしてこの侵略性、危険性を実際に具現する権力主体が絶対的天皇制であるとし、それ故、日本での闘争の第一は「天皇制の転覆」であると宣言する。封建的地主に対する「大土地所有の廃止」、ブルジョアジーに対する「七時間労働制の実現、資本主義的大経営の労農兵ソビエトによる統制」などの近代化項目は二番目三番目に位置づけられている。

これは、一段階革命論の「三二年テーゼ草案」はもとより「二七年テーゼ」「二二年綱領草案」などに較べても著しくラジカルな〝まず天皇制を打倒しなければ何事も始まらない〟というウルトラ二段階革命論として、独自かつ極左的な本質をもったテーゼだと考えられる。

この「三二年テーゼ」は『赤旗』一九三二年七月十日特別号

に掲載されたが、片山潜、野坂参三、山本懸蔵ら当時ソビエトにいた日本共産党メンバーとコミンテルンが協議して決定したという大まかな筋道が定説となっていた。[14] しかし、ソ連崩壊によって当時の機密資料が公開されるにいたり、一橋大学加藤哲郎教授らの調査研究により、その生々しい策定経過が明らかになってきた。[15] それによると、このテーゼ策定はオットー・クーシネン[16]らコミンテルン幹部によってなされ、最終的に決定したとされる一九三二年五月の〝コミンテルン西欧ビューロー会議〟なるものは実在せず、片山潜、野坂参三らの関与もフィクションであり、日本人として関わったのはコミンテルン東洋部の一職員山本正美[17]一人だったという。

前掲「テーゼ集」でも、関連論文としてはクーシネンなどコミンテルン側の解説論文が採録されているが、日本側の発言は「日本問題に関する新テーゼ発表に際し同志諸君に告ぐ」という〝国際共産党日本支部／日本共産党中央委員会〟の〝承詔必謹〟の言があるのみである。

「テーゼ集」編者の一人である山辺健太郎も後書きの解説で

> 日本では、三二年テーゼそのものよりも、三二年テーゼにでていた絶対主義の概念を固定化してしまったわれわれの側にまちがいがあった……テーゼでは、明治維新で成立したものを絶対主義といっているのに、日本では、その後もずっと絶対主義であったように理解していた。

と自己批判とも感想ともつかぬ言葉を残している。しかし、これはいささか無理筋というもので、テーゼは、現前の天皇制の打倒を口を極めて連呼し続けているのである。むしろそれに続く山辺の一言がこのテーゼの問題点を突くものとなっている。

> （＊テーゼが出た一九三〇年代に）天皇制がどういう性格のものになっていたかという分析が（＊この三二年テーゼには）ない。これが三二年テーゼの一番の欠点だと私は思っている。[18]

正にその後の研究の進展によって「三二年テーゼ」は、日本の運動者の意見や総括から出てきたものではなく、コミンテルン内部で策定され、日本の運動の現場に突然提示されたものだったことが明らかになってきた。

従って、〔三章〕で例示したプロレタリア美術家同盟の文書が、何かよそよそしい他者の言として言及している〝戦略の変更〟

> ……その基本的な部分は、日本に於て当面する××（＊革命）の性質に関する規定を、「社会主義革命への強行的転化の傾向を持つブルジョア民主主義××（＊革命）である。」と云ふ様に、最近改められたことに最も関係して居る。

といった他人事のような言い回しもこのことに関わっているものと思われる。

五．「三二年テーゼ」のラジカリズムの源泉

一九三二年、プロレタリア文化運動の終末期に、極めてラジカルな「三二年テーゼ」が〝突然〟コミンテルンという国際的上部機関から提示された。それはあくまで、外から、上から提示されたものであった。

そのラジカリズムが、日本の主体的な社会主義運動、文化運動を窮地に追いこみ、第二次大戦を志向する軍国主義、ファシズムに抵抗する統一戦線の結集を妨げ、運動自体の崩壊を招いた――という見方は現在ではほぼ事実に即したものと認められる。そしてそのようなラジカリズムがなぜ生み出されたかについても概ね明らかである。

その起源は一九二八年七月から九月にかけてモスクワで開催された第六回コミンテルン大会の諸決定・綱領に求めることができる。要約すれば――

①〔第三期論〕資本主義は崩壊の最終段階に入った。

②〔極左主義〕攻撃的、極左的路線によってこの危機を激化させ資本主義を崩壊に導く。

③〔帝国主義戦争反対〕戦争の危機は資本主義最終段階の不可避的現象と捉え、これを内乱に転化し資本主義崩壊を決定づける。

④〔社会ファシスト排撃〕共産党以外の全ての穏健な左派は、革命情勢を曖昧化する主要な敵と規定し排撃する。

という非常にラジカルな戦略を表明している。

確かにこの翌年には誰しもが資本主義の終末を想像せざるを得なかった世界大恐慌が起こり、ファシズムの台頭、第二次世界大戦へとつながっていく。コミンテルンはそのような大変動を予見したといえるかもしれない。

それはしかし結果論であって、大会決議の一つ「帝国主義戦争に反対する闘争と共産主義者の任務」[19]を見ると、コミンテルンはやや異なるポイントに注意を集中している。それは、帝国主義戦争の矛先がソ連邦に襲いかかってきはしないかという恐怖と警戒感である。そのような事態を回避するためにそれぞれの帝国主義国家内にいる共産主義者に、三万字に及ぶ長大な論文で神経質なまでの詳細な指示と注意を与えているのである。

この警戒感は、一国社会主義というシビアな道を選択せざるをえなかったソ連邦ないしスターリンの基本的なトラウマであり、コミンテルン第六回大会が指し示したラジカリズムはその必然的な防御反応だったと考えるべきであろう。

そして、一九二八年という時点ではまだナチスドイツは台頭しておらず、ソ連邦にとって最も危険な勢力〜国家は、欧州の帝国主義諸国以上に、中国大陸に露骨な軍事侵攻を開始した天皇制日本の帝国主義である。それ故、コミンテルン第六回大会

『フェンスレス』オンライン版 第4号（2016/09/20発行）
占領開拓期文化研究会 senryokaitakuki.com

のラジカリズムが「天皇制を主敵とする闘争」という「三二年テーゼ」のラジカリズムとなって日本の運動に賦課される。そして、枚挙にいとまのない〝言葉〟の氾濫がパンフレットにもビラにもチラシにも溢れるのである。

六．総括・「三二年テーゼ」の受容と終焉

「三二年テーゼ」のラジカリズムが、日本の社会運動、文化運動に及ぼした影響の帰結については、一般論としては語り尽くされた観もある。――革命は近い（三期論）という幻想をふりまいてリアルな民衆・運動者・文学者を混乱させた、社会ファシズム論によって反ファシズム戦線を分裂させた、政治主義によって文学運動を混乱に陥れた……などなどである。

しかし、同時代文書をみていくとそれで〝話はすんだ〟とはいえない。運動の現場の人々が、この「テーゼ」をある感動と共感を持って受け入れ、運動の実際に生かそうとしたという報告もある。

◆槇村浩の事例

例えば、高知の詩人槇村浩[20]の詩集『間島パルチザンの歌――槇村浩詩集』の後書きに[21]、同時代に槇村とともに運動をした浜田勇の述懐が記録されている。

> 阪神地方の秘密アドから、三二年テーゼ草案が送られてきた時、私らは一夜がかりでそれを写して廻し読みし、すっかり興奮しました。……高知四四連隊への反戦ビラまきなどもその決定によってやりました。

彼等は「テーゼ」に感応して兵営内にビラを撒くといった危険をあえて冒し当局を震撼させたが、それだけではなく、紡績工場の寮に塀を乗りこえて通い、文学サークルや資本論研究サークルを組織するといった日常活動も重ねており、作家同盟の支部も結成している。「テーゼ」には、現場を持たない中央の〝知識人〟とは異なる、実際の運動者が〝興奮〟して受容できる何かがあったということである。たとえそれが上からのラジカリズムの反映であったとしても、記憶に留めるべきことではあろう。

しかし〝無理筋〟はやはり〝無理筋〟である。

かつて「間島パルチザンの歌」や「生ける銃架」など溌剌とした反体制の進軍歌を生み出し、活動の渦中にいて捕まり数年の服役を終えた詩人槇村浩が、貴司の前に「狷介不遜の」しかし「惨たんたる病人」となって現れ、理解に余る詩稿「ダッタン海峡」[22]を提示する。元来槇村の詩は、何ということのない固有名詞・地名すらが詩のなかで生き生きとした輝きと暗喩の翼を与えられるという特質を持っている。しかし「ダッタン海峡」では、それらの言葉の異様な乱舞が人を途惑わせる。それは詩

人の〝身体〟と〝詩〟が「テーゼ」のラジカリズムに屈服した姿だといわざるをえない。

◆小林多喜二の事例

自分の文学に「テーゼ」の教条を極めて忠実に生かそうと正面から努力した、おそらくただ一人の小説家が小林多喜二であろう。

しかし他方で、多喜二が八十年以上たっても再版が続く数少ないプロレタリア小説家の一人となりえている理由は「テーゼ」に忠実な政治性にあるのではなく、小説を徹底的に〝物語り〟……テーラードストーリーとして捉える作家的スタンスにある。「蟹工船」や「党生活者」のような長篇でも、稿紙六枚ほどの掌編「テガミ」でもそのスタンスは変わらない。一般に思われているのとは逆に、多喜二の創作方法は物語りが「主」であり政治は（三二年テーゼは！）「従」なのだ。「従」は「主」の内部に埋設される……〝物語化〟される。それによって、八十年後の読者は小林多喜二に面白さを感じる。（もちろん、埋設された「従」を掘り起こすことばかりに興味をもつ読者もいるであろう。それは読者の勝手だが、作品にとっては不幸なことというほかない）

ただ、この「埋設」は、やはり〝無理筋〟であることに変わりはない。「テーゼ」が日本のリアルと乖離していればいるほどその「埋設」は無理な力わざとなり、物語の作り手を痛めつける。槇村浩はその無理に耐えられず病んだというべきだろう。しかし小林多喜二は〝今のところ〟その力わざの闘いから退却したという兆候は見出せない。

それは、小林多喜二が物語作家として類い稀な強靭な〝身体〟を持っていたためだと思われる。凡百のプロレタリア作家の中で、何故彼がそのような物語作家としての強固な身体を獲得したのか、それは作家論として秘鑰中の秘鑰であろうけれど、今それを考え詰める余裕はない。

いずれにせよ「三二年テーゼ」によって要請された運動・文化・文学の課題は、無数の文書、ビラ、チラシの文言の氾濫に関わらず、運動の崩壊によって結末を迎えた。

一九三四年二月、鹿地亘の悲鳴のような解散声明を残して作家同盟は解散する――

> 我が同盟の活動的作家たちは、……機関誌の発行の擁護、同盟費の納入、組織活動遂行等の一切の義務を放棄することによって、絶対多数を以つてそれへの不信を表明しつゝあり……過去の政策に於ける機械的な極左的欠陥……の克服を以つてしても、従来の形式はもはや作家をつなぎとめ得ない。……して見れば、かかる組織の維持は意味をもたぬ。[23]

ところが栗原幸夫『プロレタリア文学とその時代』によると

ナルプ（＊作家同盟）の解散をプロレタリア文学の発展とみる林房雄、徳永直、山田清三郎らは、いっせいに長編小説にとりかかった。「文学批評の官僚的支配を蹴って、のびのびと、自由に、大いに創作しよう」という徳永の呼びかけは、まさにこの人たちの合言葉でもあった。林房雄の「青年」、徳永直の「黎明期」、山田清三郎の「地上に待つもの」、橋本英吉「炭坑」等々の長篇が現われた。[24]

という意外な結果となる。作家同盟の解散、つまり「三二年テーゼ」の呪縛からの解放が、プロレタリア作家に大きな開放感と創作意欲を取り戻させるという逆説的成果を生み出したのである。

ただ、注意すべきは〝解放〟によってプロレタリア文学はもとの地点に立ち戻れたということではない。時代は文学を踏み越えて大きく動いてしまっていた。

第一次世界大戦の終結によってもたらされた一時の平和は、一九二九年の世界恐慌によってきしみ始める。一九三一年日本は東北中国の一帯を軍事占領して「満州国」とする。一九三三年、ヒトラーが政権を掌握する。その同じ冬、小林多喜二が特高警察によって虐殺される。一九三四年日本は国連から脱退する。そして一九三七年日中戦争が始まる。

「三二年テーゼ」から解放された小説書きを待ち受けていたのは、反抗も批判も許さない軍国主義の〝絶対主義的権力〟であり、人々はそれとどう折り合いをつけて己の生きる場所を確保するか奔走するほかなかった。

一九三五年第七回コミンテルン大会は、漸くファシズムの危険性を認知し、社会民主主義勢力を社会ファシズム呼ばわりした近親憎悪的な政策を撤回し反ファシズム人民戦線政策に転換した。そこで一九三六年二月、日本に対してもこの転換を告知する「日本共産主義者への手紙」が発せられるが、既にその頃、日本にはそれを受けとるべき組織も運動体も無くなっていた。

元来、日本の近代文学の一翼を担うはずだったプロレタリア文学運動（プロレタリア文化運動）が、ラジカルな文言をまき散らしたまま突然、途切れるように消滅するというのは、奇妙な事態といわざるを得ない。中央の、ないし上部の推移を見ているだけでは事の真相は分からない。おそらく、頭記の資料集成作業などによって見出された〝現場〟の動きや想いの焼き込まれた一次資料と、全体とを照合し直すことによって……さらには、戦後のサークル運動などにつながる、時代の底深くをかいくぐった地下水脈をさぐることで、新たな地点が見出されるのではないだろうか。（2016/2/14）

注

（1）小樽文学館所蔵「池田壽夫旧蔵書」：この文庫は戦前日本プロレタリア文化聯盟（ＫＯＰＦ）の働き手であり、評論家でもあった池田壽夫（1906–1944）が蒐集保存したもので、ご遺族によって小樽文学館に寄贈された。多数の単行本、雑誌、およびビラやチラシなどの生資料からなり、同文学館で閲覧可能である。

（2）日本プロレタリア作家同盟「第六回大会中央委員会報告」：池田旧蔵書所収の、表紙とも三〇頁の謄写版刷り冊子である。表紙に「一九三三年六月十一日（日）午前十時　於　築地小劇場」とあるが、実際に開催された形跡はない。『日本プロレタリア文学大系６』（三一書房　一九五四年刊）の巻末年表には、実質は拡大中央委員会として六月五日に開かれたと書かれている。

おそらく、官憲の介入を避けるために十一日というダミーの開催日時を公表しておいて、その何日か前に縮小した形でひそかに会合したのであろう。拡大中央委員会なら個人宅でも密かに開くことが出来る。

因みに、一年前の一九三二年五月に築地小劇場で実際に開かれた第五回大会は、臨場警官に解散を命じられ、争乱状態の中で十人近い幹部や作家が検挙拘留されている。当時もはや通常の形で左翼運動の大きな会合を開く自由は、日本には存在しなかったのである。

（3）コミンテルン：一九一九年、社会主義革命を成就したソ連邦の首都モスクワに創設された、世界の社会主義運動の総本部。各国の共産党はこのコミンテルンの支部という位置づけとなり、コミンテルン執行委員会や大会の決定事項を各国共産党は遵守することを求められた。一九四三年廃止。

〔https://ja.wikipedia.org/wiki/コミンテルン〕（2016/2/13閲覧）などによる。

（4）トロツキズム：本来は、ロシア革命においてレーニンに次ぐ指導者であったレフ・トロツキー（1879～1940）の革命思想を指す。永続革命と反官僚主義を特徴とする理想主義的な革命論で、スターリンの現実主義的な一国社会主義論とは原理的に相容れない。トロツキーはレーニン死後、スターリンとの抗争に敗れて亡命、執拗に追い迫った刺客によってメキシコで殺害された。

一般に「トロツキズム」「トロツキスト」といういい方は、スターリン時代に形成された「裏切り者」「ニセサヨク」といった攻撃的な蔑称として用いられることが多い。

〔https://ja.wikipedia.org/wiki/トロツキズム〕

〔https://ja.wikipedia.org/wiki/レフ・トロツキー〕（2016/2/13閲覧）などによる。

（5）日本に特化されたコミンテルンのテーゼ：石堂清倫、山辺健太郎編『コミンテルン／日本にかんするテーゼ集』（以下『テーゼ集』と略記）青木文庫　一九七三年刊、によると

◆「日本共産党綱領草案」一九二二年

◆「日本に関する決議」（二七年テーゼ）

◆「日本共産党政治テーゼ草案」一九三一年

◆「日本における情勢と日本共産党の任務に関するテーゼ」（三二年テーゼ）

◆「日本の共産主義者への手紙」一九三六年

『フェンスレス』オンライン版 第4号（2016/09/20発行）
占領開拓期文化研究会 senryokaitakuki.com

などが著名なものとして挙げられている。

（6）前掲『テーゼ集』31頁

（7）前掲『テーゼ集』51～53頁

（8）シンパ組織と党勢の拡大：貴司山治の小説「一九三三年」にその時期の思い出が書かれている。

三二年の祝田（＊風間丈吉あるいは岩田義道？）の再建活動は、祝田自身の天才的な指導で、中央部は地下深くにいて、……党機関紙『赤旗』の活版印刷、週刊実現――それによる党のセクト主義の清算、大衆化への躍進と、見事な転換をやってのけた。それは、これまでの党史にないような、不朽の業績といってよかった。

一方この再建党のまわりには、合法面で多くのシンパサイザーの組織が行われ、大学教授、俳優、作家、音楽家、科学者……あらゆる方面に支持者の組織がのび、しまいには皇族の中からさえ献金者があらわれた。……

ところが三二年の祝田の党は、それらのシンパ網から破綻してきた。伊達が五月に不意に検挙されてみると、伊達の献金表とでもいった書類が警視庁特高一課の、係警部の手中にあるのがわかった。それは金をわたした日時、場所、相手方の変名、伊達の変名など、いちいち事実の通りであった。

（「一九三三年」は『貴司山治小説集・丹波アリラン』貴司山治 net資料館　二〇一三年刊　57頁）

（9）飯塚盈延（みつのぶ）／スパイM／スパイ松村：渡辺政之輔のもとで組合活動での優秀さを認められモスクワの共産大学に留学。帰国後検挙中に警視庁スパイに転身、風間共産党の中央委員となり家屋資金局を担当、地下活動の総てが警視庁に筒抜けになった。そして一九三二年十月の熱海事件での共産党幹部一斉検挙を段取った後、闇に消えた。（1902～1965）

戦後、小林峻一・鈴木隆一『昭和史最大のスパイ・M：日本共産党を壊滅させた男』ワック　二〇〇六年刊、立花隆『日本共産党の研究1～3』講談社文庫　一九八三年刊、などによりその闇の全貌がほぼ明らかになっている。

（10）前掲『テーゼ集』81～82頁

（11）「三二年テーゼ」の訳文は戦後のより平明な村田陽一の訳文（『コミンテルン資料集第五巻』大月書店　一九八二年刊）があるが、ここでは編者山辺健太郎が新仮名になおす以外は「もと発表されたままの文章にした」と解説でコメントしている前掲『テーゼ集』のテキストを引用した。

（12）前掲『テーゼ集』76頁

（13）前掲『テーゼ集』79頁

（14）三二年テーゼ策定のいきさつは、例えばウィキペディア「32年テーゼ」には「日本からは片山潜、野坂参三、山本懸蔵らが参加して討議された」と書かれている。

[https://ja.wikipedia.org/wiki/32年テーゼ](2016/2/13閲覧)

（15）加藤哲郎「「三二年テーゼ」と山本正美の周辺」（『山本正美裁判記録論文集・解説』新泉社　一九九八年刊）

その概要は著者自身によるuplord

[http://members.jcom.home.ne.jp/tekato/MASAMI1.html]

(2016/2/13 閲覧) で見ることが出来る。

(16) オットー・クーシネン：元来はフィンランドのコミュニストで、ロシア革命後独立したフィンランドに親ソビエト政権を作ったが反対派に鎮圧され、モスクワに亡命した。以後、コミンテルン官僚として執行委員会書記にまで上り詰め「三二年テーゼ」作成にも関わった。スターリンに重用され、多くの亡命フィンランド人が粛清される中でその地位を保った。粛清迫害された妻を見捨て地位を保ったこと、反ロシアの気風の強いフィンランド人でありながらスターリンの忠実な官僚となったことなどから、フィンランド人からは嫌悪される存在でもあった。ところがスターリン死後はスターリン批判に移行しペレストロイカの基本路線を策定する仕事もした。いろいろな意味で極めて〝有能〟な官僚理論家だったと考えられる。(1881 ～ 1964)
[https://ja.wikipedia.org/wiki/オットー・クーシネン] などによる。(2016/2/13 閲覧)

因みに、妻アイノも日本と関わりの深い数奇を極めた経歴を持つ。オットーと結婚後コミンテルン職員となり一九三四年赤軍参謀本部の〝正式の〟スパイとして二度に亘って〝スエーデンの女流作家〟という触れこみで日本に滞在、美貌とコケットによって広い人脈を築き、著名なスパイゾルゲとも連絡があったと思われるが戦後に到るまで彼女がスパイだったことは誰にも知られなかった。一九三八年以降粛清の波に巻き込まれて拷問、シベリア送りなど辛酸をなめ、一九五五年漸く名誉回復、故国フィンランドに帰り生涯を閉じた。(1886 ～ 1970)
[https://ja.wikipedia.org/wiki/アイノ・クーシネン] などによる。(2016/2/13 閲覧)

(17) 山本正美：一九二七年から五年間モスクワの共産大学で学びプロフィンテルン（赤色労働組合インターナショナル）、コミンテルンの職員として働き、一九三二年末帰国して崩壊状態の共産党の委員長となったが一九三三年五月には検挙投獄された。公判廷での長大な陳述は貴重な資料として戦後刊行されている（『山本正美治安維持法裁判陳述集』新泉社　二〇〇五年刊）。一九四三年満期出獄。戦後は「湯本正夫」の筆名で多くの新聞雑誌に執筆。共産党組織で働いたが一九六二年〝社会主義革新運動〟に参加し共産党を除名され、以後新左翼系で活動、労働運動研究所創立に参加した。(1906 ～ 1994)
[http://www.hmv.co.jp] の『山本正美治安維持法裁判陳述集』書誌情報、[https://ja.wikipedia.org/wiki/山本正美_（日本共産党）] などによる。(2016/2/13 閲覧)

(18) 前掲『テーゼ集』255頁、山辺健太郎「解説」

(19) 村田陽一編訳『コミンテルン資料集第四巻』大月書店　一九八一年刊　378～413頁

(20) 槇村浩：高知の詩人、本名吉田豊道。一九三〇年代早期の社会主義活動家。詩に天才的才能を発揮し「間島パルチザンの歌」「生ける銃架」「明日はメーデー」など、人々の脳裏に焼き付く叙事詩を残した。一時貴司宅に滞在したこともあるが、拘禁と拷問により健康を害し二十六歳で死去。貴司はその原稿を長く保存秘匿し、戦後『間島パルチザンの歌――槇村浩詩集』を出版、また彼

を愛惜する高知の人々によって、その詩稿、評論など著作はほとんど復元刊行されている。(1912～1938)

(21) 貴司山治・中沢啓作編『間島パルチザンの歌――槇村浩詩集』新日本出版社　一九六四年刊　156頁

(22) 槇村浩の「ダッタン海峡」は、最も新しい校訂版である平和資料館・草の家刊『槇村浩詩集』(二〇〇三年刊) の猪野睦氏の「解説」によれば出獄後の一九三五年後半の作と推定される。その年十一月槇村は貴司宅を訪れ、詩集出版を依頼して他の多くの詩稿と共にこれを貴司宅に預けた。その時の槇村を貴司は前掲『間島パルチザンの歌――槇村浩詩集』の後書き「槇村浩の時代」で

槇村は二十三歳になっていて、昔みたような少年の青くささはうすれていたが、惨たんたる病人で、狷介不遜は以前より鮮やかだった。

と記している。

「ダッタン海峡」は、北海道の監獄にいる市川正一、徳田球一、国領五一郎らを励ます祝祭的な詩といえるが、ソビエト赤軍の大軍が北海道、ひいては日本列島を〝解放〟するイメージを「日本をひたすサヴェート同盟の／人民革命の保持者として声明する」と歌い上げる。

(23) 作家同盟解散声明（ナルプ解体の声明）：現在公開準備中の資料にその原文コピー（校正紙？　山田清三郎の印と誤字訂正書き込みがある）が収録されている。とりあえずは『日本プロレタリア文学大系6』三一書房　一九六九年刊　294～299頁、などで閲読できる。

(24) 栗原幸夫『プロレタリア文学とその時代』インパクト出版会　二〇〇四年刊　165頁